

「ヘロヂアス」(フロール)

紀元後三十年頃のパレスチナ。死海の東にあるマケルース城はアラビア遊牧民の侵入に備へるユダヤの大城塞であつた。城主ヘロド・アンチパスはユダヤ王となる事を望んでゐたが、宗主國たるローマがそれを許さず、ローマの代官として父ヘロド王の領土の四分の一を治めてゐた。或朝、彼は露臺ろだいに立ち不安な眼差を南方に向けた。アラビア王の大軍の天幕が見える。嘗かつてアンチパスはこの王の娘を妻としてゐたが、異母兄いぼけいの妻ヘロヂアスの美貌まよに迷ひ、彼女を奪つて妻と爲し、先妻を離別してアラビア王の怒りを買ひ、屢々軍勢を差向けられてゐたのだ。アンチパスはローマに援軍を求めたが、それが中々到着しない。やはりユダヤ王となる野望を懐く甥のアグリッパが、自分の悖徳はいとく行爲をローマに讒訴ざんそして援軍が遅れてゐるのではあるまいか。

しかもアンチパスには亦別の悩みがあつた。城の土牢にはヨカナンなる男が閉ぢ込めてあつたが、「洗者ヨハネ」とも呼ばれるこの男はアンチパスの悖徳を激しく詰り、ヘロヂアスをも

罵倒して、「昔からユダヤの民の心の中に深く根ざしてゐるあこがれを種に民の心を煽つて」ゐた。ヘロヂアスは彼の殺害を夫に強く求めた。名門の末裔たる彼女がアンチパスの妻となつたのは、自らユダヤの大帝國を支配する野望を實現する爲であつたが、その爲には敵對するヨカナンは生かして置けない。處が、夫は民衆の反撥を恐れ頗る優柔不斷である。ヘロヂアスは疑心に驅られる、夫は民の聲を恐れ自分をも離縁するかもしれぬ。

そんな折、ローマ總督父子一行が城を訪れる。饗宴の席上、ヨカナンの事や、奇蹟を行ふ噂のあるイエスの事が話題になると、招かれたユダヤ人同士が各々の信仰や偏見や「獸のやうな頑冥」を曝け出して反目し合ふばかりか、「イスラエルの昔の榮へを語り合」つてローマへの反抗心を剝出しにする。この「蟲けらどもが」と總督は苦々しく思ひ、「ユダヤ人の性格が堪らなく」なる。その傍ら、總督の大食漢の息子は食物を食べては吐き食べては吐きを繰返してゐる。ユダヤ人の反抗心に同調してゐると思はれたくないアンチパスは、卑屈に總督に追従を云ふ。

そこにヘロヂアスの連れ子サロメが登場する。頗る美貌の乙女なので、ヘロヂアスは夫の好色を慮つてそれ迄遠ざけてゐたのだが、この乙女が艶めかしく踊り出すと、男は皆「貪るや

うな情欲に胸をときめかせる」。踊りが終り、興奮したアンチパスが、何でもくれてやるぞと云ふと、「ヨカナンの首を！」とサロメが叫ぶ。アンチパスは狼狽^{うろた}へるが、約束は違へられない。やがてヨカナンの首が皿に載せて運ばれて來た。

作者フローベールはローマとユダヤとの接觸によつて「世界の局面が一新され」た決定的瞬間を「考古學的にも政治的にも可能なかぎりありのままに詳しく描」(戸田吉信譯)いたとチボーデは書いたが、それにしても、ここに描かれる「ありのまま」の人間共は、強欲、色欲、暴食、傲慢等々の所謂「七大罪惡」の權化^{じんげ}の如き輩^{やから}許りで、やはりチボーデがフローベールの「聖ジュリヤン」について評した様に、「超自然的恩寵」によつてしか「洗ひ清められ」ぬ人間の暗澹^{あんたん}たる本質をここぞと許りに曝け出してゐる。そんな世界だからこそ卻つてイエスの様な清らかな存在が呼び求められたのかもしれないが、それはともかく、「人間的な不足感」が無くなつて了つたら我々は「小鳥よりも愚劣な存在になるでせう、少くとも小鳥は木にとまるのです」とフローベールは手紙に書いた。人としての眞摯な向上心を持たずして、「ありのまま」の己れの儘にぬくぬくと人生を送る様な生き方を彼は心底輕蔑した。